

2021 年度
国際政治経済学部
自己アピール総合型入試
【小論文】
60 分 100 点

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

わたしたちはみんな、究極的には「幸福」を求めている。だから誰もが「幸福」にはなみなみならぬ関心がある。ただ、「幸福とは何か」となると答えは一樣ではない。テレビや雑誌などでは、「本当に幸福になるために」とか「あなたにとつての真の幸福は」といった類の特集が頻繁に組まれている。家族や友人たちの間の会話でも「幸福」について熱心に話し合われるし、また時には目上の人から説教がなされたりする。それほどに、「幸福」に関しての見解は十人十色である。

だから、幸福について何かを語ろうとしても、せいぜい間接的な伝達しか期待できない。「君に1リットルのミルクをあげる」ということと「君に幸せをあげる」というのでは、まるで次元が違う。後者の場合、「私」のいう「幸福」と「君」の思っている幸福とが大きくズレている可能性が高いからだ。「私」の真意は、「君」には伝わっていないか、まるで違う意味にとられてしまうことがある。

経済学とはそんな「幸福」について論じる学問である。多くの人は、経済学を「お金」について論じる学問、「儲かりまつか」を追求する学問だと考えているかもしれない。もちろん、「お金を稼ぐこと」も「商売で儲けること」も「幸福」の一形態には違いないから、仮に経済学が「お金の学問であっても、「幸福」について論じているということ自体はウソにはならない。でもここで言いたいのは、経済学が主としてテーマとしているものが、決して「お金の量」や「儲けること」ではなくて「幸福」そのものである、ということだ。

もちろん、官庁や中央銀行やマスコミによって発表される「国内総生産（GDP）」やその増加率「経済成長率」の数値で社会は一喜一憂する。GDPとは、国内で1年間に生産された商品やサービスの価値をお金で評価して合計したものだ。だから、この指標は「お金」で国民の「幸福」を測ろうとしている。これを経済学の代表的な形式だと理解するなら、「幸福」＝「金銭評価」となってしまうだろう。

しかし、ほとんどの経済学者は、このようなGDPを「幸福」そのものとはとらえていない。GDPは国民の「幸福」を測る代用的なものにすぎない、と理解しているのだ。「幸福」というのは「お金」ではないけれど、オーバーラップする部分もあるので「代理品」としようというコンセンサスを持っている、ということなのだ。

（小島寛之著『使える！経済学の考え方ーみんなをより幸せにするための論理』による）

問一 本文を三〇〇字以内で要約しなさい。

問二 あなたの考える「幸福」とはどのようなものですか。そのように考える理由と合わせて、五〇〇字以内で述べなさい。